

# 所感

## 田中 哮義

研究者となることは大学卒業後の進路としての選択肢には無かった。自分のような者が成れる職種とも思っていなかったが、成ってみたいというような憧れも特になかった。そんな訳で、偶然の所産で建設省建築研究所（建研）に採用されたものの、研究とは一体どうすれば出来るものなのかも分からず暫く戸惑っていた。周りの者の様子を伺ってみても、一般が興味を持ちそうもないことを偏執狂的に重要とと思っているらしいこと以外は、特に模範とすべき点も見られない。加えて、勤務時間を雑談で費やしたり、夕方になればゲームや宴会をやったりで、こんな仕事ぶりで本当に良いのかと時に後ろめたい感じがするくらいであった。自分に興味のあることを自分のペースでやれば良いと言うのは楽なようであるが、自分が社会にとって本当に必要とされる存在なのかと疑問になることでもある。もっとも、建研では誰もそんな心配はしている様子はなかったが・・・

しかし、そんなノンビリした古き良き時代も研究所が東京にあった時代までで、つくば移転の頃からやたらと忙しくなり、同時に研究員はサラリーマン化して来た。忙しくなったのは総プロなどの外部資金による研究の比重が増えた影響もあると思うが、それで研究の質と効率が上がったかどうかは疑問である。大学についても恐らく同様なことは言えるであろう。往時は相当に著名な先生でも書かれた論文の数は少なかった。現在の先生方は恐らくその10倍以上もの論文を書いていると思う。問題は、それで10倍以上もの研究成果が上がっていると言えるかどうかである。現在の風潮では仕方の無いことなのかも知れないが、それ外部資金を取って来い、それ論文を書け、と急かたてられているようで気の毒である。因みに、私は‘取ってくる’と言う言葉は下品な感じで嫌いである。‘取ってくる’資金の原資は血税である。社会に有益な成果を還元してくれることを期待して、国民が委託しているものと考えなければならない。その信頼に報いる気持ち無くしては‘盗ってくる’ことと差が無くなってしまう。畢竟、研究は研究者の発想と意欲に依存した事業であり、また恐らく研究費+研究時間=一定、または研究費×研究時間=一定のような関係にあらう。研究費は重要だとしても、過大な研究費を‘取る’ことによって思考するために必要な時間を失う愚に陥らないようにしたいものである。

論文はそれ自体が価値ではなく、それが社会に及ぼす便益が価値なのであるから、やたらと数多く書く必要はないと思う。因みに、資料整理の不得手な私は、論文を備忘録と見なしていた。目標への到達段階を整理して思考の過程を成るべく正確に記録しておく上で論文を書いておくことは有効なのである。また現在はインターネットを通じて様々な論文評価指標が行き交っているが、これらに振り回されるのもどうかと思う。給与や研究費を供給してくれている社会に対する義務は常に念頭におく必要があるが、他人の評価を気にしながら行う研究は悲しい。毀誉は他人の事とする信念を持ちたいものである。